

体育科教育学専門領域

近藤智靖（日本体育大学・教授）

1. あらまし

体育科教育学専門分科会（以後、当分科会と略す）は、体育方法専門分科会から分離独立し、1978年12月の総会でその設立が承認された。この設立は、1978年度文部科学省科研費「体育科教育学研究—体育科教育の総合的研究—」を担った方々が、生涯スポーツの基礎を培う「学校体育」を研究対象とする体育科教育学構築を目指して進めたものであった。1979年に『体育科教育学研究』が発刊されるとともに、日本体育学会における研究発表が継続された。その後、『体育科教育学研究』は定期的に発行され、1995年の12巻1号からは、J-Stage上に最新号とバックナンバーが電子媒体で公開された。なお、日本体育学会が社団法人化されたことに伴い、2012年度より体育科教育学専門領域（以後、当領域と略す）に名称が変更となった。

また、当分科会が中心となり、体育科教育学を固有の科学として確立する必要性と会員数の増加を背景として、独立学会の機運が盛り上がり、1993年8月の当分科会合宿研究会で「独立学会の設立」が議論され、1996年4月から日本体育科教育学会が設立された。その後、第1回大会以降第9回大会（2004年、信州大学）までは、独立した活動として、日本体育学会大会時にシンポジウムを開催した。そして、第10回大会（2015年、筑波大学）以降は日本体育学会大会と分離して学会大会を毎年1回開催し、課題研究、シンポジウム、ラウンドテーブル等を開催してきている。（本「1. あらまし」は、2016年8月に広島大学・教授・木原成一郎氏が執筆した情報コラムの文言を一部修正し、そのまま援用したものである）

2. 内外の研究動向

当領域の研究動向について二つの視点から紹介をする。一つ目は、研究論文にかかわる動向についてである。二つ目は、シンポジウムのテーマについてである。

まず、一つ目の研究論文にかかわる動向については、ここ数年、一定のトレンドが見られており、概ね以下の四つの内容に論文が集約できる。

- ① 学習指導モデルにかかわる実証的研究
 - ② 児童生徒の動作にかかわる観察的評価基準の研究
 - ③ 動機づけをはじめとした心理学分野で提唱されている理論や方法を体育授業に適用した研究
 - ④ 教員や児童生徒へのインタビュー等を通じて、その内容を分析した質的な事例研究
- このように体育授業を中心として、量的研究や質的研究のいずれもが展開されている。

次に、二つ目のシンポジウムであるが、過去4年間のテーマは下記の通りである。

2015年6月「現行学習指導要領の実施状況を問う」

2015年8月「保健体育教師（保健授業と体育授業を担当する教師）教育の課題と未来」

2016年7月「『思考力・判断力・表現力』からみた体育授業研究の実践の成果」

2016年8月「体育と保健の関連性を生かした体育科・保健体育科の在り方」

2017年7月「新学習指導要領とこれからの体育授業の在り方を探る」

2017年8月「教員養成の観点から体育と保健の関連性を生かした授業づくりを考える」

2018年6月「主体的・対話的で深い学びの実現に向けたこれからの体育授業」

2018年8月「『体育科教育学』教育の本質を問う」

※当領域では年に二回のシンポジウムを設けている

このように、「学習指導要領」と「保健と体育の関係性」の二つが主たるテーマとなっている。一点目の「学習指導要領」については、学習指導要領の改訂期にあたっていたこともあり、新学習指導要領を受けて、新たな授業の在り方についての議論が盛んに行われている。また、「保健と体育の関係性」については、大学での教員養成、授業づくり、さらには、学会組織の在り方についての議論がなされている。

3. 科学的知見の応用の状況

当領域の名称ともなっている体育科教育学は、最新スポーツ科学事典によれば、「体育授業を中心とした学校体育実践の改善を目的とした研究分野」（高橋，2006）と定義されており、学校体育実践にかかわる学問である。体育学会における体育科教育学の研究区分は、「カリキュラム論」「教授・学習指導論」「体育教師教育論」「科学論、研究方法論」の四つに整理されているが、近年の研究論文を概観すると、大半は「教授・学習指導論」にあてはまり、その研究対象は、教材・指導者・児童生徒のいずれかである。研究方法は、先記したとおり、量的研究及び質的研究のいずれも見られている。

こうした知見は、主に体育授業の改善に役立てられている。また、「体育教師教育論」にかかわる研究論文はわずかにみられており、教員養成や現職研修の場で生かされている。

4. 学校体育や大学体育に活かすべき最新知見

最新知見として次の二つのものを紹介する。

一つは、「協同学習モデル—ジグソー法」に関する研究である。もう一つは、「社会的スキル」に関する研究である。

一つ目の「協同学習モデル—ジグソー法」については、先記したとおり、「学習指導要領」の改訂を背景として、新たな授業論への模索が始まっているが、以下の東海林氏の研究はその先駆けとなる研究といえる。

東海林沙貴・友添秀則・吉永武史（2017）小学校体育授業における協同学習モデルの成果に関する研究—ジグソーJPEを適用した児童同士のかかわりを促す授業実践を通じた検討—。体育科教育学研究 33（1）：1-18.

二つ目の「社会的スキル」に着目した研究は、梅垣氏のものをあげることができる。

梅垣明美・大友智・上田憲嗣・深田直宏・吉井健人・宮尾夏姫（2018）社会的スキルの向上を促す体育における指導モデル（ASKSモデル）の検討：チーム編成に着目して．
体育学研究 63（1）：367-381

いずれの研究も、学校現場の教員が抱えている課題に対して、今後、一定の知見を提供していくものと言える。

5. 若手研究者へのメッセージ

体育科教育学を専門とする若手研究者には、様々な事柄が要求されており、大学では、体育科教育学に関連する授業を担当するだけでなく、教育実習にかかわる業務、教員採用試験対策、免許更新講習、地域の学校や教育委員会との連携等がある。しかし、こうした業務をしつつも、研究論文を作成していくことが大切なことである。また、他の学問分野と同等の専門分野であることを示すためにも、学位の取得は重要な事項であると考えられる。そのためには、「国内の教育動向を把握すること」「学校現場の教員との連携すること」「海外の教育動向の把握や海外研究者と交流すること」といった点は大切になると考える。一緒に頑張りましょう。

6. 引用文献

- 高橋健夫（2006）[社] 日本体育学会監修 最新スポーツ科学辞典.平凡社.pp.570-571.
東海林沙貴・友添秀則・吉永武史（2017）小学校体育授業における協同学習モデルの成果に関する研究—ジグソーJPEを適用した児童同士のかかわりを促す授業実践を通じた検討—．体育科教育学研究 33（1）：1-18.
梅垣明美・大友智・上田憲嗣・深田直宏・吉井健人・宮尾夏姫（2018）社会的スキルの向上を促す体育における指導モデル（ASKSモデル）の検討：チーム編成に着目して．
体育学研究 63（1）：367-381

（2018年10月2日執筆）